⑥⓪常磐自動車道 常磐双葉IC建設事業

授賞機関　東日本高速道路株式会社 東北支社 いわき工事事務所

キーワード　帰還困難区域、施工期間の短縮、関係機関の連携

全建賞審査委員会の評価ポイント

常磐自動車道の追加ICである常磐双葉ICの建設事業。原発事故による制約の中、約５年という短期間で開通させ、東北地方太平洋沖地震及び福島第一原子力発電所事故からの復興・再生事業の加速化に貢献した点が評価された。

1. はじめに

常磐自動車道は埼玉県の三郷JCTを起点とし、千葉県、茨城県の内陸および福島県の沿岸部の主要都市を結び、宮城県の亘理ICを終点とする延長約300kmの高速自動車国道である。

常磐双葉ICは、常磐自動車道　大熊IC～浪江IC間に位置し、県道井手長塚線（県道256号）にアクセスする地域活性化インターチェンジとして令和２年３月７日に開通した。

位置図

2. 事業の概要

常磐双葉IC事業は、福島第一原子力発電所事故に伴う帰還困難区域に位置しており、作業員の確保や作業時間の制限の中、以下の施工上の工夫により事業を進めてきた。

①作業員の線量管理：入退場管理、作業員全員へ個人線量計を配布し線量管理を実施した。

②現場作業の省力化：盛土転圧作業にICT建機を活用し、作業性や施工精度の向上、転圧時の作業員の削減を図った。

③施工期間の短縮：常磐自動車道本線を横断するカルバートボックスにハーフプレキャストボックスを採用し、施工期間の短縮を図った。

また、事業地およびその付近の地権者や関係者は町外へ避難しており、設計協議や住民の方への説明などに時間を要した。その中で事業の整備促進として、国土交通省、環境省、復興庁、福島県、双葉町、大熊町、NEXCO東日本からなる整備連絡協議会により、設計協議や用地買収の調整、現場内の放射線に関する課題の対応方針等、協議調整を行ない事業を進めた。

3. 事業の成果

常磐双葉ICの開通により期待される整備効果は以下のとおりである。

①復興への支援

②緊急時における避難路の確保

③除染・中間貯蔵施設事業の加速

④福島第一原発事故に伴う廃炉作業の進展

⑤消防・救急等に係る緊急車両による広域活動

常磐双葉インターチェンジ（2020年３月９日撮影）

4. おわりに

常磐双葉ICを利用して復興事業がますます加速することが期待される。

最後に、本事業の建設にあたり、地権者及び工事関係の皆様方などすべての皆さまに、この誌面をお借りして、改めて心より深く感謝申し上げる。

賛助会員　前田建設工業㈱、㈱ガイアート、㈱関電工、㈱吉久建設